

卷 頭 言

年 頭 の 辞

福 田 武 雄



福 田 武 雄 所 長

今年もまた“年頭の辞”を書かねばならないときになった。毎年のことながら、この頃になって、いつも疑問に思うことは、われわれが、なぜ、年末年始に当たって大きわざをし、あるいは、これを重要視するのかということである。“新年おめでとう”といっても、なぜおめでたいのかわからないし、“初日の出”といっても、元日に太陽が変わった現象を呈するものではない。要するに、年末年始といっても、われわれ人間が、無限に連続する時間の中に、勝手に設定した区切りにすぎない。しかしながら、われわれが住んでいる地球上の自然現象は、365日の周期で繰り返されるから、この365日を1年とし、無限の時間帯を1年ごとに区切ることは、いろいろな意味で便利でもあり、また有意義でもある。問題は、この区切り点をいつにするかということである。1年の周期の区切りは、理論的には、夏でも春でも、いつでもよいわけであるが、これを、冬の寒い時期に設定したことについては、われわれの祖先は賢明であったと言える。おそらく、われわれの祖先は、今でもそうであるように、農産物の自然生産によって生命を維持していたので、これらの仕事が一段落つき、あるいは、一時的に不活潑になる厳冬期を選んだものと思われる。

暦の上の1年にたいし、われわれには法律的に4月1日から翌年の3月31日にいたる“年度”というものがある。この“年度”は、筆者にはその設定理由がまったくわからず、世界的に共通なものでもなく、またきわめて不都合な点が多いので、筆者は、“年度”を暦の上の1年に一致させるべしと主張する1人である。4月1日から始まる“年度”には、きわめて不便・不都合な点が多い。たとえば、ある年の統計といっても、1月1日から始まる1年間の数字か、4月1日から翌年の3月31日までの数字か、どっちかわからぬ場合が多い。米国では、会計年度も教育制度も7月1日から翌年の6月30日までを1年度としているが、この場合には、たとえば1958-59年度としているから、混乱を起こすことはない。研究費予算にしても、国会で決まってから各省庁の事務的手続が終わって、われわれの手許に来るのは、たいていは7月ごろになる。このことは、われわれにとっては、研究費が4月1日からすぐに使えないという不便のほかは、別に問題はないのであるが、農学関係ではきわめて困っているときいている。すなわち、農学関係の研究では、いつからでも研究を開始してもよいというものではなく、たとえば1年間の生育状況等を研究するには、4月か5月ごろに種子を播いたりして研究活動に入らねばならず、その時期にはまだ予算が使えないので実に困っているという話をしばしばきいている。また、積雪の多い寒冷地方の土木工事についても、現在の年度制度はきわめて不都合である。このような地方では、12月から3月頃まではほとんど工事ができない。また一般に、5月から8月までは日が長くて工事に最適である。しかるに、国会や県会等で予算が決まり実際に工事にかかるのは早くも7月になり、実際に工事ができるのは1年の約半分にしかすぎない。この場合、もし年度が1月1日からであれば、4月頃から工事にかかれ、すべての点において非常に好都合になるはずである。以上のような意味で、いわゆる“年度”を1月1日からにするように改めることを主張する。

それはともかくとして、年の変わり目において、過ぎし1年間の経過や経験を顧みて、反省し、将来への計画・希望をもつことは、何事によらず有意義である。筆者は、このごろ下手なゴルフを始めたが、半ラウンドあるいはワンラウンドごとに、悪いスコアに自分ながらあきれながらも、今度こそはと、新しい希望を次のラウンドに期待するのが常である。われわれの研究所で、昭和34年間の事項として何をおいても特筆しなければならないのは、いうまでもなく、東京移転の問題である。顧みると、3月の終りに本決まりになってから、教授総会の議などを経て、条件を付して東京移転を決意してから、移転事業の進行、要望条件の実現のために、関係各方面と折衝を続けてきたが、思うようには行かないままに昭和34年も終わってしまいそうである。昭和35年には、一部の研究室の移転が実施されると思われるがそれまでに、移転計画の全体が確定し、要望条件の実現の見通しがつくように、及ばずながら懸命の努力をし、またこれについて関係各位のご援助とご理解をお願いして、この筆をおくことにする。

(1959. 11. 4)